



廣 瀬 川

第83号

平成25年
8月9日

仙台市小学校長会

発行者／堀越 清治（会長） 責任者／榊井 裕（広報部長）

主張

指定都市研究協議会仙台大会と教育課題 ～震災・防災・復興の視点に立った学校経営を～

会長 堀越 清治（荒町小学校）



今年も8月6～8日、市内全ての小中学校から集められた数万羽の折り鶴でメインストリートの一角を飾る伝統の「仙台七夕まつり」が華やかに開催される。昨年、一昨年、復興と鎮魂の祈りを込めたその飾りは、見る人の目をくぎ付けにした。東日本大震災から2年5か月が経とうとしている。

この間、全連小の露木前会長の卓越したリーダーシップにより、2年間にわたり全国の校長会から多額の義援金などの温かい支援や励ましをいただき、大変勇気づけられてきた。また、堀竹新会長も5月の第65回総会の席上、被災地の教育諸条件の整備など、息の長い支援の継続を表明された。心から感謝したい。

仙台市小学校長会は、宮城県小学校長会と共同で、今年3月に「東日本大震災記録集 3.11からの復興 絆そして未来へ」を発行し、各県及び各指定都市の小学校長会等へ送付させていただいた。震災直後からおよそ1年7か月間の学校の取組について、校長の決断や判断に焦点を当て記録にまとめたものである。復興に向けた教育に示唆を与える貴重な資料と自負する一人である。更なる活用を図り、当事者としての実感を込めて後世に語り継ぎたいものである。また、宮城教育大学との連携により復興に向けた数々の実践事例を集め、記録にまとめた。

七夕飾り、復興事例集に見られる各実践の根底に

は、千年に一度の大震災からの復興は教育の力で成し遂げる、復興を支える成人になるための小学校教育に込められた渾身の力が見られる。この精神は、震災後、仙台市小学校長会が心一つに取り組んできたものである。各学校は、被害の程度に違いはあれ、他者を思いやり、子どもたちが将来を思い描いた教育の推進に努めてきた。

震災後2年間、仙台市小学校長会は、教育の流行と不易を踏まえ、困難な状況の中であって、小学校教育のあるべき姿を追究してきた。東日本大震災は、被災者や被災地にとどまる問題ではなく、環境・経済・エネルギー問題など、様々な分野領域で世界中の人々に影響を与えた。一地域、一国の問題は、好むと好まざるとに関わらず、世界中の問題なのである。

震災から3年目を迎える今年11月、私たちは、研究主題を「夢と希望をもち、たくましく生きる子どもを育む学校経営の推進」と設定し、第67回指定都市小学校長会研究協議会仙台大会を開催する。

本研究協議会は、「震災・防災・復興」の視点から今日的な教育課題に取り組んできた仙台市小学校長会の発表・発信の場である。全連小及び指定都市小学校長会からの支援に感謝の気持ちをもって当日を迎えるとともに、これまで情熱と英知を結集して取り組んできた教育による復興の具体と熱い思いを伝えたい。

内 容

○主 張	1	○提言「復興に向けた創造ある教育」	8
○特集・復興「復興への新たな取組」	2	○退会者からのメッセージ	10
○学区紹介「地域とともに」	6	○編集後記	20

特集・復興

復興への新たな取組

一歩，一歩，前へ！

茂庭台小学校 猪股 亮文

平成23年4月から平成25年3月まで、本校の子どもたちは、震災被災のため、図書室やPCルーム等の特別教室への立ち入りが禁止され、3階建ての南校舎と北校舎1階のみを使っての不自由な学校生活を強いられました。正に、震災が子どもたちの学校生活に暗い影を落とし続けた2年間でした。

このような状況下、平成23年度に着任した私は「選択と集中」を念頭に、散見される課題から子どもに係る最重要課題（究極目標）を見極め、その改善に向けた教育課程の編成と、編成した教育課程に基づく教育活動を組織的に展開することを企図しました。これからの学校における組織マネジメントは、目標管理に加え、協働システムとしての機能を重視しなければなりません。子どものよりよい姿の実現に向け、チームとしてワークする前提に、校長による最重要課題の見極めとメンバー間の合意が必要であり、わけても組織的な改善活動への継続的な取組というミッションの共有は必須であると考えました。

まず、子どもたちの「これから」と「いま」との交点から「なすべきこと（最重要課題）」を浮き彫りにすることに取り組みました。仙台市教育復興基本計画に示された四つの力と、本校の学校評価や仙台市標準学力検査等の結果及び本校教職員がもつ切実感・必要感をクロスさせ、最重要課題を「地域の一員として地域の方々とのかわりをおして、自己表現力を向上させること」としました。次に、それに迫る一里塚として、当該年度の重点目標を「論理的思考力、コミュニケーション力、感性・情緒を三位一体としてとらえた『聴く力と話す力』の向上」と設定しました。また、論理的思考力やコミュニケーション力の向上、豊かな感性・情緒の醸成などの点で、優れた教育的効果があるとされる「体験的な活動」を重視し、重点目標実現のために、「体験に根ざす言葉を大切にする授業」を教育課程編成の主軸に据えました。さらに、「体験的な活動」の実施に当たっては、そのクオリティアップのために、保護者と地域の方々へ、体験と言語をつなぐ活動に対する積極的なサポートを繰り返しお願いしました。

着任から2年目の平成24年度、最重要課題と重点

目標、教育課程編成の主軸を継続しつつ、自らの学校経営のぶれない基軸と確かな基盤を明確にしたいと考えました。そして、基軸に校内研究を位置付け、基盤として、協働型学校評価の推進、地域協働推進部と重点目標アプローチ委員会を特設した学校運営機構の活用、茂庭台校区学校支援地域本部の立ち上げと計画的運用を据えました。基軸と基盤を明確にし、三者協働による体験と言語をつなぐ活動の計画的・組織的な展開を教育課程に織り込むとともに、体験に根ざした言葉を大切にする授業づくりの歩みを確かなものにしていきたいと考えました。

この年、重点目標の実現に向けた取組は加速しました。地域の森を自然解説員の皆さんと共に探索し四季の変化を体感した1年生。児童館の職員の方と共に児童館の図書室利用の在り方について考えた2年生。もなか作りの和菓子職人の方と共に海外向けのもなか作りに挑戦した3年生（外国籍児童が在籍）。地域の農家の方と共に大根マイスターを目指した4年生。お年寄りの生活上の困り感を校区内の具体的な場所と関連付けて洗い出した5年生。専門家の指導の下、自作の校区内災害ハザードマップを地域の方々へ示した6年生。これらの活動を学習支援ボランティアとして支えてくださった、のべ300名にのぼる保護者や地域の方々。子どもたちは、こうした皆さんと共に学ぶことで、そのつながりの大切さをより強く自覚するようになりました。年末には、児童会から、家族や地域の方々へ感謝の気持ちを伝える復興宣言を示すこともできました。三者協働による体験と言語をつなぐ活動の展開が、多世代の人々の出会いと交流の契機になるとともに、子どもたちと地域の方々とのつながりを紡ぐことも実感できました。

平成25年4月、全教室が使用可能となりました。今年度は、経営の基軸と基盤を校内外において積極的に可視化したいと考えています。そして、地域の多世代をつなぐ出会いと交流の創出を通して、「子どもの自己表現力アップ」に向けた三者協働の実が上がるような学校経営に努めたいと考えています。

特集・復興

復興への新たな取組

被災校における小中連携と交流

折立小学校 菅原 幸二

1 はじめに

折立地区は、団地の一部が滑動崩落の被災を受けた。隣接する本校は危険と見なされ、震災数日後から校地及び校舎への立ち入りが禁止された。

折立中学校敷地内での学習活動は今年で3年目を迎えるが、平成23年4月から中学校の特別教室や修折館（武道館）などをお借りして教育活動を開始し、同年11月からは中学校敷地内に建てられた仮設校舎（普通教室棟）に教育活動の場を移した。また、翌年3月に特別教室棟も完成し、平成24年4月からは、最低限の学習環境は整った。

この環境の中で、これまで多くの方々の御支援や御協力をいただいてきたが、教育活動を推進するに当たり、中学校との連携なくして教育活動は進まないことを痛感した。

2 連絡調整を密にした施設借用

平成23年度当初から、体育館や武道館、校庭など、中学校が使用しない時間帯を確実に把握し、可能な限り小学校で使わせていただいている。小中の校長が常に連絡を取り合い、中学校長の了承のもと、教頭・教務主任・体育主任等がそれぞれの立場で中学校担当者と連絡調整を密に行うことで、朝会などの全校集会や体育学習、学校行事（運動会、学習発表会など）の実施について、滞りなく進めることができています。

特に、低学年の水遊びから高学年の水泳までのプールでの学習は、2年目の昨年度から中学校のプールを一定期間小学校で借用し、水深を調整しながら集中して学習を行ってきた。3年目を迎える今年度は、昨年度を上回る期間を借用し、6月3日にプールでの学習がスタートした。

また、昨年度実施できなかった夏季休業中のプール開放事業に当たっては、中学校の配慮により、新たに今年度は10日間を小学校の使用期間として借用できる運びとなった。

3 ピンチをチャンスにする取組

(1) 中学校長との連携

折立小学校に着任し、中学校との連携を進めるために、中学校の校長とのきめ細かな連携が不可欠であると考えた。中学校の校長には随時連絡や相談の機会をもっていただき、小学校の学習環境や教育活動の現状について御理解いただいた。相談の度に

「要望があれば言ってほしい。可能な限り対応したい。」との話をいただいた。

今年5月、中学校敷地内での教材園や鉄棒の設置は、本校にとって教育環境の大きな改善である。

(2) ソフトランディングに向けた取組

児童生徒が、毎日同じ敷地内で生活することにより、児童は中学生の生活の様子や部活動（運動部）の様子が分かり、いつしかあこがれの存在として見るようになった。中学生も小学生に答えるように立派な態度で接してくれている。

年度末に、児童が中学校の授業見学を行ったことで、中学校の様子がよく分かり、児童は希望を持って中学校に進学することができている。

小中教職員の自然な形で行われる情報交換や小中双方の授業研究の参観等が児童の指導に生き、中一ギャップ克服に向けた一助になっている。

4 児童生徒の交流

小学校入学当初の一年生は、中学生と一緒に登校する姿が多数見られた。登校時の新一年生の不安を先輩の中学生が上手に解消しているように思えた。

中総体前の中学生へのエールは今年で3年目を迎えた。小学生は上学年が中学校に向かって、エールを送り、中学生は全生徒がベランダに出てエールを受ける。中学生も小学生に対してエールを返す。熱い思いを込めて交流する児童生徒の姿には、こみ上げてくるものを感じ



る。さらに、高学年児童有志が中学校文化祭で合唱を披露する機会をいただいている。児童にとって大きな自信につながるとともに、中学生からの小学生を心からたたえる雰囲気が感じられる。

5 今後に向けて

これまでの連携や交流に加え、今年度新たに学力検査の結果を生かした情報交換を行い、学力や生活習慣等の課題を共有した教育活動の取組を進めたいと考えている。また、中学校教師による出前授業の実施についても検討している。

近い将来、元の校舎に戻るようになるが、現在の環境ならではの連携を大切にしながら、今後の新たな連携強化に向けて検討していきたい。

特集・復興

復興への新たな取組

自ら学びを拓く児童の育成

広瀬小学校 河原木 美智也

本校は、開校140周年を迎える地域に根差した伝統校である。学校の南側には齋勝川が緩やかに流れ、緑化保全地区に指定されている。また、校歌にも歌われている「蕃山」がそびえたち、四季の変化を色鮮やかに伝えてくれるなど、緑に囲まれた豊かな自然環境に立地している。

大規模団地造成に伴う児童数の急増のため、平成21年3月末に「愛子小」が開校し分離した。現在は児童数が700名弱の中規模校となった。

平成24年に出された仙台市教育振興基本計画では、仙台市が今後10年間で目指す教育の姿と、最初の5年間で取り組む施策の方向性が示された。そこには、現在の教育を取り巻く社会の現状と教育の課題を踏まえ、「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」を育むことが目標に掲げられている。

このことを受けて、本校では、学校教育目標として「自分を拓き強く生き抜く力をもつ地球人の育成」を設定した。「思いやりのある子供」「たくましい子供」「自ら学ぶ子供」(めざす児童像)の三つの柱を基として、それぞれの柱の中で「豊かな心」「健全な心と体」「確かな学力」を育むことを重点化して教育活動を展開しているところである。

とりわけ、確かな学力の育成については、「活用・探究活動」における生活科・総合的な学習の時間のもつ役割は極めて大きいと捉えている。そこで、これらを充実・発展させる中で、本校のめざす児童像の具現化を図っていくこととした。

本校では、研究テーマでもある「自ら学びを拓く児童の育成」のために、生活科や総合的な学習の時間の特質でもある児童の思いや願いを大切にしたいと学習の実現を目指したいと考え、児童が自分事として考え、取り組むことができる単元づくりを一つの視点として、①価値ある学習材を用いた単元の立ち上げや出会い、体験活動の工夫、②探究のサイクルを意識した小単元のつくり込み、③学習過程における「試行錯誤」「繰り返し」「問題解決の壁」の意図的な場面設定等を具現化の手立てとして取り組んできている。現在、緑に囲まれた豊かな自然環境、地域

の価値ある学習材、学習の活動に積極的に協力してくださる人々、地域の諸団体などを生かして教育活動を展開しているところである。

昨年度は、単元の立ち上げや学習材の取り上げ方などに焦点を当て、研究に取り組んだ。中心となる学習材を児童と教師でじっくりと検討して決めるようにしたことで、それぞれの学年で意欲的に活動に励む様子がよく見られた。

◇昨年度の取組例(単元名)

3学年「われら公園探検隊!~公園のステキを広めよう~」(地域)

4学年「ラーメンで町を盛り上げよう~ぼくたち愛子結麺会!~」(地域振興)

5学年「伝えよう僕らの町の宝物~広瀬龍神伝説~」(地域)

6学年「ファイナル・ミッション2012~心をつないで未来へ~」(生き方)

自ら学びを拓く児童を育成するためには、「こんなことをしてみたい」という意欲を持たせることが極めて大切である。それゆえに生活科や総合的な学習の時間では、児童一人一人の思いや願いを単元に生かしていく。児童が思いや願いを切実に持ち、それらが学習を通して、ふくらんだり、広がったり、高まったりすることで、思いや願いの実現に向けて探究の意欲が向上する。その過程において、困難な場面に直面しても、協同的に考えたり、試行錯誤を繰り返したりしながら、一層本気で考え、人と関わりながら粘り強く学んでいけるような単元づくりを行っているところである。

子どもたちが、近い将来、自己実現に向けて、地域社会の中でよりよく生きていくことができるように、自分でよく考え、正しく判断して、しっかり行動することができる自立した児童の育成を目指していきたい。同時に、多くの人々と互いに支え合い、助け合って生活していることを自覚し、自らも、社会の一員として、周りの人々を支えることのできる力と社会性を兼ね備えた社会貢献のできる児童の育成にも取り組んでいかなければならないと考える。

特集・復興

復興への新たな取組

東六番丁小で進めている復興への新たな取組

東六番丁小学校 渡部 力

1 はじめに

5 月中旬のマスコミ報道である。平成27年 3 月に日本で開催予定だった国連防災会議の主会場は、仙台市に決定。報道に先立ち、ある放送局から取材を受けていた。昨年 7 月 3 日の世界閣僚防災会議での東六地区・東六小学校の発信から、新たな取組を考えていきたいという。頂戴した本テーマにもある「新たな」の意味について触れ、私見を述べる。

本校の実践は、「明日の子どもたちのために 教育復興実践事例集 p 124 他」(平成25年 3 月, 仙台市小・中学校長会, 宮城教育大学), 「廣瀬川79号座談会, 80号 p 2」等をご覧いただきたい。

2 教訓と「釜石の奇跡」

およそ3,000人の児童生徒が東日本大震災から難を逃れた「釜石の奇跡」は、周知のとおりである。「自助」の精神に基づく片田教授(群馬大学)の徹底した指導が、かけがえのない命を救った。「てんでんこ」は、古くから地域に伝わる教訓であり、震災の7年前からこの指導が始まったと聞く。教訓に学んだ「釜石の奇跡」もまた、教訓となるに違いない。

3 理念や思いの継承

教訓は言葉や内容である。言葉や文字を通して後世に語り継がれる。しかし、時の経過とともに感情や感覚は薄れ、形式化した知識や活動となって伝えられる傾向がある。教訓から学ぶためには、先人の気付きや驚き、考え方や生き方を学び、必要としてきた(いる)価値を知ることが重要と考える。

地域の中にある価値や文化は、理念や思いの継承とともに存在している。昨年、世界閣僚防災会議で次のことを発表した。地域学習は、子どもの感性を育て、地域にコミュニティーの形成を促す。本校での「新たな取組」は、地域にある価値を再現し、「人・もの・こと」に内在する理念を学ぶことである。

4 まちの文化を学ぶ授業

このまちには、地域情報紙の「038(おみや)プレス」がある。情報の発信と共有を通して、地域の活性化を図ることを目的として発行されている。地域住民を中心に構成する委員会が企画・編集し、平

成23年 3 月から全戸に配布している季刊紙だ。紙面を飾るのは、東六地区に住む人々、商店主、歴史、各種団体の行事や学校の取組など多様である。

5 年生の担任が考える今年度の総合の単元構想を紹介する。子どもに038プレスを提示し、発行の意図を考えさせる。編集委員や記事に取り上げられている方々の生き方について調べる。よりよいまちづくりに取り組んでいる方々の考え方について学び、将来の生活を思い描き、発表する計画だ。社会科で「報道」を学習する 5 年生が、地域にある文化を教育活動に取り入れ、理念や思いに触れながら体験を通して「プレス」を学ぶのである。

5 教育課程に吹き込む理念

震災後、職員に力説し、求めていることは、地域にある(伝わる)有形無形の文化や日常生活にある価値を学ぶ学習の推進である。学習を通し、子どもは地域への愛着を感じ、地域の方々は有用感や充実感を味わいながら価値を共有したいと考えている。日常的な関わりはまた、しなやかで強靱なまちをつくる大きな礎になると考える。

教育課程の編成や実施に校長の指導性が求められているのは、経営方針を具現化する一丁目一番地だからである。真摯に授業づくりに励み、授業レベルで経営方針を具体化する職員の成長に拍手である。

6 おわりに

校長は、第一義的には、子どものよりよい成長を願って学校経営に努めている。子どもの変容は教師の力量形成とともにあり、真摯に教員一人一人の指導力の向上に努める必要がある。昨今、校長の大量退職が大きく取り上げられているが、教育課程に経営理念を反映させる校長の取組は、後継者育成の場そのものであると考える。

震災後、様々な機関や分野から、校長の現状認識と学校の目指す方向性が注目されている。私は愚直に、教育課程のPDCAに軸足を置き、教育の力による復興を目指した学校経営に努めたい。

※拙稿は、教育研究シリーズ第50集「知識基盤社会における学校経営」提言 2(第一広報社)と併せてお読みいただければ幸いです。

学区紹介 地域とともに

地域の特性を学びの糧に

向山小学校 村山 和枝

【地域の歴史に学ぶ】「藩祖公鎮まるところ向山」「金華山はるかに望む向山」この一節は、校歌の1, 2番の冒頭の歌詞であり、当校の学区の特色を端的に表している。

学区内の大年寺山に、一般公開されていない四代藩主綱村公以降の伊達家の墓所がある。年に一度12月初旬に、向山小の6年児童と地域のボランティアの皆さんが墓所の落ち葉はきを行う。この催しは、地域の方々が長年、墓所の清掃を通して子どもたちや地域の人々に、仙台藩の歴史を身近に感じてほしいという思いから続けているものである。この他にも仙臺総鎮守愛宕神社や隣接学区の瑞鳳殿などは、6学年の総合的な学習の時間のカリキュラムを構成する大切な教材となっている。

【地域の自然に学ぶ】先の「金華山はるかに望む」にあるように、当校は緑に恵まれた高台にあり、旧県児童館に隣接している。この旧県児童館の児童公園部分が今年度から仙台市に移譲され、向山中央公園として再スタートした。これに伴い、児童公園の

南西に広がる森林地帯も、児童モデル遊園保存緑地として野草園の管理下に入り、にわか教材としての可能性が広がってきた。今後、仙台市の公園緑地課や地域のボランティアの方々にお手伝いいただきながら、この保存緑地の3学年における教材化の可能性を探り、身近にある自然の教材開発を図っていきたいと考えている。

【地域の施設に学ぶ】隣接学区の、八木山動物公園との連携による2学年の生活科の単元「カバさんにんじん」の学習も、4年目を迎える。カバの糞を肥料にして、八木山動物公園の職員の方々の指導の下、学校の畑に人参の種をまいて育て、収穫する。その収穫した人参をお返しとして、動物園のカバに食べさせに行くという、動物園との連携ならではの環境学習と言える。自然界のエネルギーの循環を、子どもたちの親しみやすい動物の糞を基に学ばせたいという、動物園の職員の方々の思いが支える得難い学習である。

以上、学区の特性を生かした教材化の現状からも、学校を取り巻く環境と地域の方々の支援があってこそ、地域に根ざした学習が成立することを実感している次第である。

学区紹介 地域とともに

地域との絆を更に深めるために

大沢小学校 大泉 淳一

大沢小学校は今年で開校141年目を迎えます。同窓会組織はありませんが、古く芋沢小学校時代から、大沢村立、宮城村立、そして宮城町立の時代を経た今も、地域の学校として多くの方々に支えられ、また地域と連携しながら教育活動を行っています。

その一例を紹介します。

【各種支援について】

本校は、多くのボランティアに支えられています。地域や世代によって、学校に対する思いや関わり方に違いがあるのが特色です。以前から大沢地区に住んでいる方や年配の方々には遊びを中心として、比較的新しい団地に住んでいる方や若い方々には学習を中心として御協力をいただいています。

新旧住民間の関係づくりに苦慮し、課題を抱える学校が多い中で、大沢地区は、地域、学校双方の先輩諸氏の知恵と努力と工夫により、良好な関係、強い絆を保ち続けようと努めています。

【防災教育について】

本校は、平成19年度に開設された大沢市民センターの公開講座「大沢地区地域防災安心ネット」に参加しています。開講当初は、住んでいる地域によって防災に対する意識に違いが見られたようですが、東日本大震災後は、地域全体の防災意識が高まり、現在は連合町内会を中心として地域防災計画作成に取り組んでいます。

本校は、震災当時、体育館が被災したため避難所としての機能を果たすことができませんでした。そのため、地域ではあらゆる状況を想定して計画を立てています。小学校も様々な場面を想定しての学習や訓練が必要になってきています。

今年度は、特に小学校でも児童の自助・共助の力を高めるために、市民センターの公開講座と連携した出前授業なども検討中です。また、保護者の防災意識を高めるために、緊急時引き渡し訓練前の授業参観では、全学級で防災教育副読本を活用した授業を行い、学校全体としての防災意識の高まりを目指すなど、地域との関わりを大切にしたいと考えています。

学区紹介 地域とともに

地域人としての人の輪づくり

大野田小学校 飯坂 新

新築川を境に地下鉄富沢駅東側一帯が本校の中心学区です。今、学校周辺は土地区画整理事業に伴い、40m・16m・12m道路が縦横に巡らされ、同時に宅地も整備され、一帯は、正に、新興住宅地の様相を呈しています。学校南側には、コミュニティーセンター、老人福祉センター、児童館が一体となった複合施設や保育園、授産施設が隣接する校地半分ほどの公益施設用地があります。児童館は、既に震災年度に閉館していましたが、地域説明会が未開催だったため、急きょ、今年の1月末に開催されましたが、その中で、ともに3.11を経験した複合施設管理者として施設合同の防災訓練を実施したいという話が持ち上がりました。コミュニティーセンター等は補助避難所であり、学校は無論指定避難所です。合同実施のためには様々な課題を乗り越える必要がありました。

震災当時、体育館には、ピーク時で400名の避難者がいましたが、早々に、町内会有志により炊き出し用白米600kgが支援物資として届けられました。人

知は無力であることを思い知らされた震災でしたが、ここ大野田は人の情けが厚い地域であることを再確認できました。同席した町内会長の方々の合意の下、学校・地域合同の防災訓練の話は容易にまとまり、6月末の土曜日に授業日として、親子、そして地域住民一緒に1,500人規模で実施することとなりました。最初の訓練なので、発災想定時刻を、老人福祉センター・児童館等の利用者のピークの時間帯とずらして設定せざるを得ませんでした。実施して見えた課題は、次年度の計画づくりの中で解決していくつもりです。

一方、この地域には古くから住んでいる方も多く、その方々は子どもたちとの世代間交流を実に楽しみにしており、本校のブラスバンド部は、地域の祭りという祭りに招待されます。ブラスバンド部による演奏披露は、コミュニティーセンター、市民センター、町内会、授産施設、老人福祉センターでの祭り、加えて中学校文化祭でも行われ、子どもたちは世代間交流の担い手として、地域に貢献しています。

子どもたちが、家族と心をつなぎ合わせ、近隣の方々と手差しを合っていくことの大切さを、このような世代間交流を通して、更に内面化させていくことができれば、望外の喜びです。

学区紹介 地域とともに

地域共生科から生活・総合的な学習の時間へ

七北田小学校 坂本 憲昭

七北田小学校は、平成21年度から4年間、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、「社会の中で、よりよく生きる力を児童一人一人に育むために、地域と深くかかわり、働きかける体験活動と学習を重視した教科を創設する教育課程の開発」を研究課題とし、「地域共生科」に取り組んできました。

地域共生科では、地域社会を学習の場とし、地域の方々との関わりを通して、「社会の中でどのように生きていくのか」「どのような社会をつくっていくのか」などを考え、実践する学習活動を進めてきました。その結果、学校教育法21条にある「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う能力」を直接的に育てることができたと考えています。

主な学習活動として、1年生では「げんきだいさくせんinななきた」、2年生では「見せるぞ！お兄さんお姉さんパワー」、3年生では「おじいちゃんお

ばあちゃん わたしたち」、4年生では「すきだっちゃ！七北田」、5年生では「よりよい未来を思い描こう」、6年生では「私たちでつくろう 住みよい七北田」をテーマに、主として七北田の町を元気にするための取組を行ってきました。

昨年度は、最終年度として、地域共生科を通常の教育課程にどのように戻していくのかをテーマとして各学年で取り組みました。生活科・総合的な学習の時間にスムーズに移行できる見通しがついたことで、これまでどおり地域や保護者から支援をいただきながら子どもを育てていくことができることになりました。

地域共生科を進める上で、様々な苦労がありましたが、成長した子どもの姿、学校と地域の関係、保護者との関係を見れば、私たちが取り組んできたことに大きな意義を感じます。七北田小学校は、地域から絶大な信頼を得ています。この信頼に応えていくことが私たちの使命であり、それが目の前の子どもの成長につながることを信じ、今後も地域との連携を進めていきたいと思っています。

提言

復興に向けた創造ある教育

求められる未来を切り開く力の育成

仙台市小学校教育研究会 会長 西嶋 茂雄 (虹の丘小学校)

未曾有の東日本大震災から 2 年が経過しましたが、今なお、深く刻まれた傷はまったく癒えることはありません。こうした状況の中、各部会におきましては、子どもたちの心のケアを最優先課題とするとともに、研究の特性を生かしながら、家庭・地域との連携を重視した数多くの実践研究を積み重ねてこられました。こうした取組を通して、「地域に信頼される学校」及び「地域とともに歩む学校」を実現させたことは、ひとえに、各部会長のリーダーシップによるところ大であると心から感謝申し上げます。

さて、震災後 3 年目に当たる今年度は、昨年度の研究を踏まえて、引き続き、教育活動全体を通して、教育による復興を最重要課題として研究活動をより一層展開していくことが求められております。その基軸となるのが、「仙台市教育振興基本計画」と言えます。この「仙台市教育振興基本計画」の趣旨を踏まえて、今後、5 年後、10 年後の目指す仙台の教

育の姿を見据え、全教職員の創造性豊かな教育実践を通して、全ての研究教科・領域が、一致結束して取り組んでいくことが重要であると考えております。とりわけ、教育を取り巻く社会的環境がますます厳しさを増してきている今日において、全ての子どもたちに「時代の変化を受け止め、未来を切り開いていく力」を育成していくことは、喫緊の今日的課題と言えます。また、新たな防災教育を推進することにより、災害時に自他のために的確に行動できる力を育むことは、まさに時代の要請と言えます。こうした状況を鑑みて、常に「仙台市教育振興基本計画」に立ち返り、教育の課題を明確にしながら教育活動を遂行することが、私たち校長に課せられた使命であると考えております。

今後とも、仙台市小学校教育研究会の発展のために、「オール仙台」を合言葉とし、諸先生方からのより一層のお力添えを賜りたくお願いする次第です。

提言

復興に向けた創造ある教育

防災・安全対応能力の育成

2 地区会長 今野 俊男 (八幡小学校)

2012 年 3 月末、折立中学校敷地内に特別教室棟が完成し、仮設の校舎ながら教育活動を行っていく環境が整ったところで本校に異動となった。

着任時に、前任校との被害状況の差異に少しとまどいながらも、大震災の教訓をしっかりと受け止め、何よりも優先して、子どもたちに「自助」の力を付けさせるための教育を志向していかなければならないと決意したことを覚えている。

まず、「命にかかわる危険な場面に遭遇した時にもっとも安全な行動を選択できること。」「様々な危機に遭遇した時に自ら回避するための基礎知識を身に付けること。」「常により安全をめざし主体的に行動しようとする態度を身に付けること。」の三つを重点目標に設定した。そして、学校教育活動全般を防災・安全の観点から広く見直し、対応能力としての知識・技能・態度を身に付けさせるために、各教科・領域等を関連付けた全体計画や年間指導計画を作成した。1 年をかけて防災頭巾を全員の児童に準備させ、本年 6 月、それを使って避難訓練を実施し

た。集団で避難する前に、子どもたち一人一人が行うべきことを明らかにして訓練を行った。

ところで、本校の通学路の大部分は、道幅は狭いが交通量は極めて多い。子どもたちは、車と自分の体との距離を常に意識しながら登校してくる。毎日、自ら判断し、選択して安全を確保し、行動しなければならない場面に置かれていると言える。重点目標は、自然災害だけに対応させたものではない。

「自助」の力を育てることと併せて、助け合って他者を大切にできる子どもを育てるためにも、子どもたち同士の学び合いや、子どもたちと地域や地域の方々との結びつきを深めることを大切にしている。

本校では、復興プロジェクトの一環として、各学級が順番に校門に立ち、あいさつ運動を行っている。初登場の 2 年生が、校長会義援金で購入したのぼりを手に、地域の方々や登校してくる子どもたちに笑顔で挨拶を交わす姿を見せている。卒業生が見せた姿が、2 年生にしっかり受け継がれていることがとてもうれしい。

提言

復興に向けた創造ある教育

避難所運営委員会立ち上げに果たす学校の役割

4 地区会長 菊池 健 (市名坂小学校)

私は、大震災直後に本校に着任した。従って、避難所となった本校の様子を実際は見えていない。しかし、事後、地域の防災に関する会議等によると、避難所運営がうまく機能したとは言えなかったようである。他の避難所同様、教職員がフル回転してしのいだのが実情らしい。

仙台市では、大震災を教訓に「仙台市防災計画」を改訂した。同時に避難所運営マニュアルも改訂した。改訂マニュアルによれば、キーワードは「自助・共助」。避難所を運営するのは、避難者も含め、町内会、学校、各種団体、区役所等の公共機関。今、仙台市では、各学区毎に「避難所運営委員会」立ち上げの「事前協議」開催を呼びかけている。しかし、町内会・各種団体等、立ち上げの重要性は認識していても、動きは鈍いと聞く。「また、大震災が来るかもしれない。」「このまま役所任せ、他人任せでいいのか?」「避難所運営委員会立ち上げに向けて誰かが音頭を取らなければ・・・」私には焦りもあった。

大震災のような非常時、校長としての使命は「子

どもの命を守り、安全・安心を確保する」ことである。

私は、避難所運営委員会立ち上げに動いた。ただし、委員会立ち上げまでを限定として。連合町内会長、各町内会長、民生委員等、学区内の各種団体の方々に立ち上げの趣旨を個別に説いた。区役所にも伝えた。誰からも異論が出なかった。それどころか、誰か音頭を取るならば、全面的に協力するとのことだった。ここからは速かった。防災主任が市の改訂マニュアルを基に、地域性に配慮した案を作り、平成25年1月に「市名坂小学校避難所運営委員会立ち上げに関する事前協議」を実施し、その会で委員会を立ち上げた。更には、3月にも委員会を開催し、実際の震災を想定した「運営委員会模擬会議」を実施した。しどろもどろの点多々あったが、参加者一同、何とかイメージがつかめたようであった。

これらを踏まえ、6月12日には、仙台総合防災訓練(泉区)が、本校を会場に実施された。まだまだ課題は残るものの、参加者の動きが3月より主体的、そしてスムーズだったことは言うまでもない。

提言

復興に向けた創造ある教育

全ての教育活動で行う道徳教育を意識して

6 地区会長 玉淵 安夫 (連坊小路小学校)

東日本大震災から2年4か月が経過し、各学校では新しい防災教育への取組が始まっています。その目標とされているのが、「自助」「共助」の精神をもった児童生徒の育成です。災害時にどう判断して自分の命を守るか、また、他の人のため地域のためどのようなことができるか、子どもたちに考えさせ、実践に結び付けられるようにしていきたいと思えます。

併せて、日常的に自分のできることをきちんと行い、友達と力を合わせて他人、社会のためにできることを進んで行う「自助」「共助」の精神を培っていかねばならないと感じており、その一方策として道徳教育を学校経営や教育活動の中心に位置付けてはどうかと考えています。

「自助」「共助」という言葉は、震災後に殊更強調されるようになりましたが、人として大切なことで、道徳教育に以前から掲げられてきた内容と合致しています。日常の学習や生活に際して、それらの内容を意識して指導・助言し、子どもたちに気付かせていくことが大切だと思います。また、道徳的実

践を働き掛ける生徒指導や道徳的実践・体験の場である特別活動と、自らを振り返りよりよく生きようとする内面を育む週1時間の道徳の時間の指導を効果的につなげていくことが必要となり、教員の意識を高めることとともに学校全体で取り組むための組織づくりが求められます。しかしながら、現在の学校組織では、道徳教育について話し合う場が十分に確保されているとは限りません。「生きる力」として唱われた知・徳・体をバランスよく育むためには、確かな学力や健康・体力の育成を推進する指導部会と並行して、道徳教育を推進する指導部会も必要です。

確かに、道徳教育は考え方・捉え方の違いから暗い時代を過ごしてきましたが、社会ではその必要性を求める声が大きくなっていますし、現に「生きる力」の主要な柱となっています。全ての教育活動を通して行う道徳教育の大切さ・必要性を再認識し、道徳教育を中心にして「自助」「共助」の精神を涵養していくことは、復興に向けた教育に大切なことの一つだと考えます。

退会者からのメッセージ

後輩に期待すること



地域に浮かぶ船

西 辰三 (前 片平丁小学校)

校長としても、教頭としても、最初の赴任地は石巻の沿岸部でした。大震災直後、自校の避難所運営に忙殺される日々でしたが、前勤務校のことは頭から離れることはありませんでした。避難所に届けられる新聞を、毎日沈痛な思いで広げていたのを覚えています。その後、何度か見舞いに出かけましたが、退職後のある日、平日に行ってみることにしました。

前勤務校は、仮設住宅が校庭に建てられたままでした。子どもたちの教育活動とともに仮設で暮らす住民の営みが厳然とそこに在るのです。確かに瓦礫は片付き、道路は補修されましたが、ただそれだけです。復興課題の大きさに胸が締め付けられます。

しかし、「やっぱり学校は地域の核だ」と仮設の住民が語ってくれます。子どもたちがいるからこそ、住民全員で考えることができる、というのです。

「学校は地域に浮かぶ船」という言葉が以前からありますが、今、改めてその意味をかみしめています。片平丁小の避難所運営も正にそのとおりだったので、地域の力で乗り越えてきました。

後世に語り継ぐべきことは、被災の大きさなどではなく、そこに住む者の再生力、生きる力ではないでしょうか。そして、それはまだまだ途上です。

学校に課せられた責務は大きいものがあり、数十年かけての取組になりそうです。皆様方の御健康と御活躍、そして仙台市小学校長会の全国に誇れる活動の更なる発展を祈念しております。

これまで、ありがとうございました。

これからも挑戦！

伊藤 弘行 (前 八木山小学校)

3月の卒業式が終わった週の日曜日、今年も泉ヶ岳の山頂までスキーを担いで登り、滑ってくるこ

ができました。これは私の26歳の頃から始めた、年に1回の年中行事です。自分にとっての健康チェックでもあります。こうして退職するまで、やれるとは思っていませんでした。山頂の雪の上でコーヒーを飲みながら、前の見えない吹雪の中を滑り降りたことや小さな雪崩に巻き込まれたことなど、様々なことが思い出されました。もちろん、来年も挑戦です。

校長として勤務した八木山小学校では、とても楽しく充実した日々を過ごさせていただきました。特に最後の2年間は、道徳教育の自主公開に取り組むことができ、長年道徳教育に携わってきた者として、感慨深いものがありました。先生方が真剣に指導案検討を積み重ねてきた結果、教師の授業力が高まり、子どもたちが自分の思いや考えを表現するようになるなど、本当に充実した時間となりました。

6月の下旬に、国会で「いじめ対策法」が可決されました。学校に調査・報告義務が課せられるなど、これまで以上に学校課題が複雑・多様化し、更に校長の学校経営の手腕がより問われる時代になっていくものと思われます。今こそ重要なことは、学校と地域が一つになった組織力です。地域の特性を生かし、協働性の高い学校を創造されることを期待しております。

最後に、仙台市小学校長会のますますの発展と各校長先生方の御健勝と御活躍をお祈りいたします。

仲間へ感謝

日下 渉 (前 金剛沢小学校)

児童数8名教員2名の小さな浜の分校が私の教員生活のスタートでした。複々式指導も初めての経験で試行錯誤の毎日でした。小さな学校ながら宿直も経験し、家庭訪問も仙台とは違い、夕方から始まり一日一軒を主任と二人で訪問し、酒を酌み交わしながら話をするなど何から何までが驚きの連続でした。

初任者の私に教員としての心構え、授業の在り方

など、時には厳しく、そして優しく指導してくれたのは、先輩や同期の仲間でした。そして夜の飲み会では、教育論や理想の教師像などについて遅くまで話したことが昨日のように思い出されます。

社会科の全国大会では、すばらしい先輩と出会い、これまでの指導の甘さや教材研究の在り方等、一から教えていただきました。数々の失敗もありましたが、先輩や仲間から助けていただきました。仲間がいたからこそ成長ができた感謝の気持ちで一杯です。

特に仲間のありがたさを感じたのは、教頭時代でした。学校における窓口としての保護者・地域の方々との関わり。そして、先生方からの相談など多様な仕事の中で、困ったときや苦しいとき、たくさんの仲間から励まされたり、勇気付けられたりしたことは忘れることができません。

校長時代も、地域や保護者からの苦情や人事など、分からないことは近隣の校長先生はもちろん、多くの先輩から助言をいただき、様々な問題を解決することができました。

無事退職することができたのも、たくさんの仲間を支えられたお陰と感謝しています。ありがとうございました。

ありがとうございました

齋藤 俊子（前 八木山南小学校）

今年の春くらい、桜前線の北上が気になる年はありませんでした。開花宣言が出された4月のある日、白石に出かけてみることにしたのです。白石城で、満開に咲いた桜を眺めながら、前回、花見をしたのはいつ頃だったのだろうか？と考えてみましたが、思い出すことができませんでした。桜の咲く頃、学校は、年度末から年度始めにかけて一番忙しい時期です。花見どころか、季節の移り変わりにも気付かないまま過ごしてしまう、毎年、そのような日々を送ってきたような気がします。白石城での花見は、ゆったりと流れる時間の中で過ごすことのできる贅沢、幸せを強く感じた一日でした。そして、「退職」したのだということを改めて感じさせてくれた一日でもありました。

牡鹿町立鮎川小学校から始まった38年間の教職生活。様々なことがありました。失敗したことは数えきれないほど、困ったこと、悩んだことも山ほどありました。でも、私は学校が大好きでした。子どもたちと共にいることが大好きでした。「明日も学校

に行きたい」と思わせてくれたのは、いつも子どもたちだったような気がします。子どもたちから「元氣パワー」をたくさんもらった38年間。そして、保護者や同僚の先生方から助けていただき、支えていただいた38年間でした。今は、これまで出会った多くの方々に、感謝の気持ちで一杯です。本当に、本当にありがとうございました。

近 況

鈴木 修（前 湯元小学校）

昔から「暇ができたらゆっくり読もう」と言い訳しながら、買った本をため込む悪癖がありました。例に漏れずそれらの大半は『古典』の類であります。定年になって自由な時間が増えたからといって、急に『文学青年』ならぬ『文学成年』になれるわけではないのですが、それでも少しずつ未読本を取り崩していこうと思っているところです。

この年になりますと、40数年ぶりに目を通した『徒然草』などに、妙に新鮮な感覚を覚え自分でも驚いています。第三十八段「名利」（名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ・・・）などは、もう少し早く読み返して、自分を振り返っていたら、などと考えてしまいます。

最も自分には、兼好法師に御心配いただくまでもなく、多くの敵をつくったり、自分の死んだ後に、残された人々に災いを残すほど財産があるわけもなく、その点ではまったく安心なのですが。

同じく『徒然草』から第十段「家居」（家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ）、これも今の自分の心境かなと思っています。自宅と1年ほど前に主を亡くした実家を往復しながら片付けに励んでいる今日この頃です。何せ、読書と同様に「暇ができたらゆっくり片付けよう」と後回しにしてきた“つけ”を一生懸命に返しているところです。

末筆ながら、会員皆様の御健康御活躍をお祈りいたします。

ありがとうございました

河鱒 敏文（前 立町小学校）

過ぎてみれば瞬く間と思える年月でしたが、その間はそれはそれは長い長い一日や、本当に終わりはあるのだろうかと思える一年もありました。児童と

保護者や職員が安心できる学校を目指して日々の学校経営に取り組みましたが、思うように行かないこともありました。それでも皆様に助けられ笑顔で過ごすことができました。それぞれの学校で、経営がやりやすいようにと惜しみなく理解と協力をしてくださった教頭先生をはじめ、職員の皆様に感謝します。大変なことは数々ありましたが、何とかつぶれないで持ちこたえることができたのも周囲の皆様のお陰でした。

記憶に残る事の一つに校長新任一年目の東北連小学校長会仙台大会の事務局があります。そもそも、東北連小そのものがどんなものなのかも分からぬままに始まった事務局は、何とか進めることができましたが、大会が終わったころようやく概要が見えてきた、というのが正直なところでした。たくさんの先輩方に支えていただいたことに、今でも感謝の気持ちで一杯です。

日々、多くの先輩校長や同期に助けていただきました。自分からお聞きすることがほとんどでしたが、地区会長さんをはじめ、わざわざ心配して声をかけてくださった先輩方もたくさんおられました。何とか退職を迎えられたのも、校長会のネットワークのお陰と感謝しております。ありがとうございました。

震災を経験して

神谷 良夫 (前 国見小学校)

昭和53年、教員になって4年目に宮城県沖地震を経験しました。訳も分からず指示されるままに動きまわりました。そして、退職を目前にした2年前、今回の大震災に遭遇しました。地震の規模や被害ももちろん大きく違いましたが、私にとって最大の相違点は、その立場からくる責任の重さでした。

断続的に続く強い揺れの中で、いつ避難の指示を出すのか、雪の舞う寒い校庭でいつまで待機させるのか、情報のとれない中で厳しい決断を迫られた数時間でした。こうした経験のない危機的な状況での指示は、最終的には校長個人の判断で行うことになります。自分の判断に数百名の生命がかかっている、校長になったときに自覚しなければならなかった責任の重さを、本当の意味で実感したときでした。

今、そうした重圧から解放されて、自分の周囲のことだけ気にして暮らせばいいという立場になってみると、学校の先生方、とりわけ校長先生が、その社会的責任の重さにふさわしい待遇を受けているの

だろうかと、改めて考えてしまいます。

今回の震災では、子どもたちの笑顔が地域の人々の希望となっていることを実感しました。今、学校に必要なのは明るい未来を語ることであり、子どもたちに夢を与えることです。そして、その中心にいるのが校長先生です。

学校を取り巻く環境が厳しさを増している中ですが、心身ともに健康に留意され、ますます御活躍されることを期待しています。

笑い声が絶えませんね

竹川 訓由 (前 川平小学校)

▼スープカップの中で、何か動いています。

「スープの中をハエが泳いでいるよ〜！」

『平泳ぎかい？それともバタフライかい？まさか、スキューバじゃないよね！ところで、藁は浮いていないかい？』▼四谷赤坂麴町、チャラチャラ流れるお茶の水。そうかそうか、草加、越谷、千住の先だ。これは、フーテンの寅さんの口上です。驚き桃の木山椒の木。おっと合点承知之助。何か用か九日十日・・・。地口にもユーモアがあります。▼看板屋の宮坂さんに仕事が入りました。「社員を鼓舞するような看板を作ってくれませんか」。宮坂さんは、考えぬいて（これだ！）。それが「俺がやらなきゃ誰がやる」。意気揚々と、看板を掲げました。これを見た社長は、???。看板には「俺がやらなきゃ誰かやる」。架空の主人公宮坂さんが活躍したラジオ番組『小沢昭一の小沢昭一的こころ』。▼ユーモアが分かる、ユーモアで返すことができる、そして、ユーモアで笑えるという職員室の環境は最高だと思います。ユーモアは、心の余裕から生まれます。職員の仕事が減らすこと、これも大事な条件です。▼「職員室はいつも笑い声が絶えませんね。明るくていいですね」という声が今でも耳に残っています。たまらなく嬉しい声です。職員室を包む笑いは、苦労が大きければ大きいほど豊かになります。▼今、机があるのは、事務室。毎日顔を見せるのが、1年生、2年生、3年生。そして、乳幼児です。さてさて、児童センターをどんな笑いに包めるか、いい塩梅に奮闘中です。



退職して4か月 ～雑感～

杉田 通世(前 北中山小学校)

私は、この頃、朝の連続テレビドラマで3月11日の大震災(津波)をどう描くのか気になっています。先日も閑上・荒浜・塩釜方面に行くことがありましたが、今も続く住民の様々な苦勞に胸が痛みます。学校教育の現場を去り4か月目に入りました。テレビ・新聞では、「いじめ」と自殺に関する報道が連日なされています。第一線で頑張られている校長先生方の御苦勞に頭が下がります。

児童館に対する親の願いは、子どもが安心して楽しく過ごすことだと感じます。安心・安全の確保のために避難訓練や安全教室を実施したり、子ども同士の関わりを豊かにする活動を工夫し実施したりしています。経験豊かな職員に助けられながらの児童館運営です。児童館でも学校と同じように子ども一人一人の様子に目を配りアンテナの感度を高くするようにしています。幸い職員の連携が良く、すぐに情報を共有しあって対応する雰囲気があり、それが保護者にも理解されているようです。児童館では、親の子どもへの「しつけ」が直接的に見える部分がたくさんあります。学校で見られない姿を子どもたちは見せてくれます。危険な、乱暴な言動への注意、からかいやいじめにつながるような言動への注意に気を使います。「子育て」という言葉を知りました。子ども自らが自身の力で心身ともに成長することです。大人の関わり方の質が求められるようです。

今年度前半は、子どもたちが外で楽しく遊べるように広い館庭の草刈りに励んでいきたいと思いません。

学校づくりとは 心打つ音楽を作り奏でること

大谷 義昭(前 荒巻小学校)

「おかえり！」

「ただいま！ 館長先生、おスモウしよう！」

今日も元気な子どもたちの声で児童館は満ちあふれている。

「ハイ、すぐに手を洗って」「連絡帳を見せてね」「〇〇さん、風邪なおった？無理しなくていいよ…」次々に職員の温かく的確な指示が一人一人の心に響いていく。

4月1日から、これまでは授業が終わると「さよ

うなら」と見送っていた子どもたちを迎える立場になった。

新しい勤務先となった八乙女児童館は八乙女小学校の校庭東側にあり、休み時間になると館の前庭にある遊具では、先生方とともに子どもたちが鈴なりになって遊んでいる。

学校の外側から見ることのできる、本当に平和でステキな光景だなあと心から思う。

それも、教職員が一丸となって頑張っている学校と、子どもたちの健全育成を支えてくださっている保護者や地域との連携があればこそその姿である。

最後の勤務校となった荒巻小学校では、「あら・ちき・ねっと」(荒巻小学校・地域ネットワークシステムの略語)を組織させていただき、「あらちき」(あら・ちき・ねっとの基地=教室)を拠点として、多くのボランティアの皆さんのご協力を得ながら、子どもたちの学習や生活をサポートしていただいた。心掛けたことは、単にお手伝いいただくのではなく、このような子どもをともに育てたいという共有ビジョン(協働型目標)を持ち、創造的に教育活動に取り組むことであった。

その概要は、昨年度発行された「まなのわ」第2号に掲載されているので参照願いたい。

真の意味で開かれた学校を創造するために、その青写真を描くのが校長の仕事であると私は考える。音楽の世界に置き換えれば作曲家であろう。指揮者は教頭であり、コンサートマスターは主幹教諭・教務主任となろうか。各パートリーダー(首席奏者)は学年主任となる。オーケストラの世界は厳しい。年功序列は全く通用しない。常に、我が身を厳しく管理しながら新たな演奏テクニックの習得に励み、他の芸術にも目を開きながら我が人間性を磨かねば、あっという間にその地位をなくす。換言すれば、そのような音楽家だからこそ、人の心を打つ演奏が可能となる。

学校現場も同じであろう。顕在的なカリキュラム(各学校にあるカリキュラム)はもちろん大事だが、自らを常に高めようとする教師の姿こそが潜在的なカリキュラムとして、子どもたちが夢やあこがれをもつことに大きく機能するのだ。

校長先生方、どうぞお体には十分に気を付けて学校経営を頑張ってください。



子どもとともに

中舘 富也(前 北仙台小学校)

6月15日、東京で、全日本小学校管楽器教育研究会の平成25年度総会が開催され、本会3本柱の一つである「バンドフェスティバル」の報告がなされました。特筆すべきは、西日本ブロックからの報告でした。各ブロック間の交流の成果が報告される中、震災以降交流という言葉だけでは言い尽くせない、「被災地神戸」と「被災地仙台」の音楽を介しての強い「絆」が育まれたという報告でした。

震災の年には、南材木町小学校の子どもたちが神戸を訪れ、駅地下街で、1,000人を超す神戸の方々に演奏を聴いていただくとともに、一緒に復興の歌を歌い、通行人の方も足を止めて歌い涙していました。

去年は、榴岡小学校の60名の子どもたちが神戸を訪れ、神戸市内の中学校を訪問した際は、被災当時の神戸の記録や写真、DVDを観ながら復興への歩みを心と頭、そして体全体で感じ取ってきました。

翌日の神戸文化ホールでの子どもたちの演奏と語りかけは、聴いてくださったすべての方々的心を揺さぶり、大きな感銘を与えました。演奏発表後の聴衆の皆さんの心温まる大きな大きな拍手が、その証だだと思います。懇親会では、小学校長会の会長を務める全日本小管研の副会長さんからこんなお話をいただきました。「6月7日、指定都市代表理事會に出席させていただきました。すばらしい会の運営でした。11月、また仙台に行くことを今からとても楽しみにしています。『さすが、仙台ですね。』」

11月の仙台からの発信を御期待申し上げます。

命みつめて

藤本 治(前 加茂小学校)

退職してから、早3か月になろうとしています。この間、私は仙台と札幌を行ったり来たりの毎日を過ごしてきました。理由は、高校・大学を同じ学校で過ごした、無二の親友の所に行き来していたからです。

私の友人は、現在、「パーキンソン病」で闘病生活をしています。病気を発症してから16年程になり、経口摂取も困難になってしまい、「胃ろう」という胃に穴を開けてチューブを使って栄養補給をしなければならない状態になりました。

4月に行ったときには時間がかかりながらも口から飲食できたのが、わずか2か月程で経口摂取ができなくなってしまったのです。そのため、暖かくなったら一緒に外出や外泊をしようと約束していたことも、実現できるかどうか分からなくなりました。

少しでも友人の力になりたいと思い2年早く退職したのに、思いのほか病状の悪化が早く、何もできない自分に情けなさすら感じます。しかし、会いに行ったときに強く握り返してくる友人の手と眼差しは、そんな気持ちを癒してくれます。

交通事故が元で亡くなった父親や友人、亡くなられた方々の掛け替えのない命を思い、私は校長在職中の6年間、子どもたちに命の大切さを説いてきました。教職を離れ、改めて一人の人間として「命」や「生きる」ということについて考える毎日です。

現場で、子どもたちの教育に心血を注がれている校長先生方に、心からエールを送ります。

復興の先にある 教育の創造を目指して

野澤 令照(前 寺岡小学校)

つい先日、ある被災地へ出向いて話を聞かせていただいた。その時の教育長の言葉が忘れられない。「子どもたちは、お客さんの前では元気ですよ。でも、学校から仮設へ帰る時の表情を見てください。それが、子どもたちの真の姿です。」想像を絶する経験をした子どもたちの心の傷の深さは計り知れない。今後の復興の在り方を深く考えさせられた。

縁をいただき、現在は宮城県・仙台市の教育復興に関わる仕事をさせていただいているが、厳しい境遇にある子どもたちを支えるために、学校の力を結集する必要性を強く感じている。子どもたちが直面したことを「負の経験」に終わらせず、未来へつなぐ教育復興の土台にしなければならない。

仙台市では、同じ市内にありながら各校の被災の状況に大きな違いがあった。それを乗り越えるために仙台市小学校長会では、復興プロジェクトを立ち上げ「新たな教育の創造」と「被災地仙台からの発信」に力を注いできた。仙台市小学校教育研究会の各部会での取組、それぞれの学校でなされた取組、さらに仙台七夕や陸上記録会で取り組まれたプロジェクトなど、オール仙台の想いを胸に積み上げてきた実践は、必ずや実を結ぶものと信じている。

11月の指定都市小学校長会研究協議会仙台大会では、復興の先を目指し、次代を支える教育の創造に

挑戦する仙台市小学校長会の姿を全国に発信してほしい。そして、仙台市小学校長会の確固たるアイデンティティを世に示されることを心から期待している。

変 化

田野崎 博（前 北六番丁小学校）

校長会の皆様には大変お世話になり、在職中にいただいた御指導と御厚誼に大変感謝しています。

学校を離れると、日常生活の些細なことが時に気になることがあります。

蛇口をひねると水が出ます。ところが、家や職場ではひねるといふより、栓を押し上げるか押し下げると水が出ます。また、我が家では、数年間に電磁調理器具に替えてから、火（炎）を見ることが少なくなり、この数か月はまったく体験していません。そして、何より歩くことが減りました。

子どもたちの自然体験や運動不足が指摘されて久しく、私たちの生活自体が日々変化していることに改めて気付かされる毎日です。

産業・経済の構造も私が教職に就いた頃とは、随分変化しています。そうした社会の変化に対応し、生きる力を育成する観点から、キャリア教育が導入されたことは御存知のとおりです。

社会生活やその構造変化に伴う様々な問題が学校経営上の諸課題となっていますが、これからの子どもたちに対して、自然に対する畏敬の念や働くことの意義を学ばせる必然性がますます高まっているように感じています。特に、労働によってモノやサービスが生産され、社会が互いに結びつき支え合う集合体を形成していることを学ばせる意義は大きいと思います。

学校には様々な求めがあり、解決に導く校長先生の御苦勞には改めて頭が下がります。

地域の思いを感じて

佐藤 豊喜（前 台原小学校）

「いいですよ、ぜひやりましょう。」

4 月、ある地域の方を訪ね、児童館の企画行事で地域の歴史などを教えていただくボランティアガイドをお願いしたところ、初対面にもかかわらずすぐ快諾され、とてもうれしく思いました。

第二の職場として児童館に勤めて 2 か月が経ちま

した。改めて深く感じるのは、地域の力であり、子どもの健全育成への思いです。このボランティアの方には、年 5 回のガイド全てを引き受けていただきました。その他、子育て支援クラブの皆様には児童館の環境整備として花を植えていただいたり、町内のある家からは七夕かざりの竹を提供していただいたりと、物心両面で地域の子どもの育成に協力を惜しまないその姿勢に本当に頭が下がります。と同時に、地域の皆様の温かな気持ちに伝えていかなければと身の引き締まる思いがいたします。

今、こうして、また子どもたちの育成に関わる機会を与えていただいたことを喜びとし、地域との連携を大切にしながら、微力ではありますが役目を果たしてまいりたいと思うこの頃です。

仙台市小学校長会の皆様には、本当にお世話になりました。在職中、様々な問題や困難を乗り越えることができたのも校長会の先生方皆様の温かい御助言御支援のお陰です。紙面をお借りして改めて深く感謝申し上げます。末筆ながら仙台市小学校長会のみますの御発展を心よりお祈り申し上げ、メッセージとさせていただきます。

初めて書いた色紙

川村 達（前 黒松小学校）

平成24年度「離任式」の前日の出来事だった。いよいよ明日で、子どもたちとの別れという気持ちも高まっていた。まだ、最後の片付けがあり、校長室の片隅には段ボールが転がっている状態だった。

いつもいらっしゃるボランティア 2 名が神妙な面持ちで入ってきてお礼を述べられた。その日はお花を生けていただいている方もいらしたので、3 名の方とコーヒータイトになった。離任式には落ち着いてお話もできないからとわざわざ来てくださった。

ひとしきり話が終わったところで、布袋の中から出てきたのは「色紙」だった。何か寄せ書きでもくださるのかと思ったら、記念の言葉を書いてほしいと言われた。これまでいただくことはあっても書いたことがないとお断りしたが、「お会いできなくなるので記念に書いていただきたい」とのたつてのお願いであった。根負けして受けることにはしたものの何を書けばいいか困ってしまった。

振り返ると、これまでのどの学校でも地域の方々に助けていただいた思い出しか出てこない。

特に黒松小では、東日本大震災時の地域の活動が目につかふ。「地域は引き受けたから、子どものこ

とだけやってくれ。」「避難所は学校から借りて運営しているんだ。」などありがたい言葉ばかりだったことを思い出す。そんなにお世話になった方々への言葉となると・・・考えて考えて考え抜いてその日の夜に書いた言葉は「ありがとう」の一言だった。

これに尽きた。

児童館での新しい体験

堀米 千鶴子 (前 将監西小学校)

子どもと関わりたくて、児童館勤めを始めました。児童館は、児童クラブ(小学生の留守家庭児童)の小学生ばかりでなく、0歳児から18歳までの自立のための子育て支援及び保護者の子育て支援を目的にした施設です。健全な遊びを提供し、子どもたちの健康を増進し、情操豊かにすることを目的としています。毎日、午前中は乳幼児とその保護者、午後からは小学生と過ごしています。また中学生も過ごしていきます。企画行事には高校生も参加します。地域の子育て会議など地域全体にも関わります。

子どもたちに藤の葉の茎で編む通称「ざる」の作り方を教えたら、館の一大ブームになりました。館にある藤の木が丸裸になるのではないかと心配になるくらい、男の子も女の子も熱中して編んでいます。また、シロツメクサで髪飾りや首飾りを編むのを教えたときもブームになりました。そして、ブームはあっという間に次の遊びへと変わっていきます。

乳幼児も、大勢の中で遊んでいると、1週間くらいでも大きな成長が見られます。はいはいをしている赤ちゃんでも、周りにいる子の遊びをじっと見ている、おもちゃに手を出し同じように遊ぼうとします。まねて遊ぶことで遊び方を獲得しています。

昔の遊びを思い出し、子どもたちに伝承したり、遊びを通して成長に関わったり、これまでの学校生活とは、ひと味違う接し方ですが、子どもたちのいる環境にうれしさを感じています。もう少し、この環境で頑張っていきたいと思っています。

頭と体を鍛えよう

紺野 利次 (前 八乙女小学校)

「みんなもテレビのニュースや新聞で知っていると思いますが、私たちの仙台市・宮城県・東北地方はとてつもない被害を受けました。元の姿を取り戻

す(復旧・復興)には相当な時間がかかるでしょう。おそらくみんなが大人になる頃も、その途中だと思います。」

「みんなには是非、復旧・復興の役に立つ人になってほしい。そのために、毎日の勉強を頑張り、積極的に体を鍛えてほしい。頭と体を鍛えてほしいのです。」

「たとえば、どんな地震にも倒れない建物や、どんな津波にも負けない強い堤防を造る建築家。放射能で苦しむ人を助けるお医者さんや看護師さん。正しいことをきちんと教えることのできる学校の先生。夢や希望を与えるスポーツ選手。放射能を取り除く技術を考え出す科学者等々。どんな仕事でも一生懸命取り組むことが復旧・復興につながります。」

平成22年度修了式、卒業式、以来平成23年度24年度始業式、朝会等すべての児童が集まるときの私の話は、いつも『頭と体を鍛えよう』でした。

恐らく、どこの小学校の校長先生も私と同じ考えで、仙台市・宮城県・東北地方の未来を今の子どもたちに託したと思います。

成果が現れるには時間がかかります。いつの日か、子どもたちが成長し力を発揮し、素晴らしい仙台市・宮城県・東北地方を創り上げることを期待しています。どうぞ子どもたちの指導をよろしく願います。

子ども観

久能 和夫 (前 榴岡小学校)

過日、日頃お世話になっている市長部局の方にお目にかかった折、「4月から大学の方に勤めていると聞きましたが、何が変わりましたか。」と単刀直入な質問を受けた。

3月31日、公務としての校長職の任を解かれ、気持ちを落ち着かせる間もなく4月1日に辞令を受け、新しい環境の下であっという間に過ぎた2か月余り。30有余年にわたる小学校現場を中心にして教師生活を送ってきたその長さには比して、わずか2か月の生活は余りにも短い。

しかし、その短さの中において、明らかに変容しつつある兆しは感じていた。それは、「子ども観」の変化である。小学生と日常を過ごしてきた私の目には、接続する中学生、そして高校生は、小学生の子どもたちにとってのモデルとして、大きな姿、存在として映っていた。

翻って、学ぶ側の出口に立つ大学生と接する日々

において、そこに上がってくるまでの高校生、中学生の姿を、可能性を秘めた「幼き存在」として、とらえ始めているその変化である。

立場が変わると目に見える世界が変化するという言葉は先輩方からよく聞かされていた。入り口で猶豫されていた子どもたちのキャリア形成、その立ち位置での環境に甘えていなかったらどうかという忸怩たる思いがよぎる今日この頃である。

備えあれば・・・。

菊地 秀敏 (前 高砂小学校)

在職中は、危機管理面に配慮した視点で日常生活を送っていたが、今は再就職がかなわず専業主夫としてのんびりと暮らしている。

新年度になっても相変わらず度々大きな地震が発生し、今でもその度に緊張感が走る。ここ数年間での習慣がすっかり身体行動として起こるのである。

現職の校長先生方は、地震速報の度に学校のことや児童、そして地域のことを考えながら生活しているのではないかと察する。

復興の進度も異なり、仙台市内の小学校でもかなりの温度差がある。現在、小生は時間があれば現状を認識し、自分でできる事があるかを確かめるために、車で青森、岩手、宮城の沿岸部、そして福島の内陸部に出かけている。仙台市内には知ることのできない現実を目の前にしながら、何もできない自分に自省の念が走る。何か自分なりにできることに取り組んでいくことができればと考える日々である。

備えあれば・・・。高砂小では、東日本大震災前日の2011年3月10日に、年度最終の小学校区地域防災会議を開催しており、6月の地域と一緒の防災訓練の内容や避難教室割当、そして町内会の役割等を話し合っていた。その成果が、そのまま震災当日の避難所運営委員会の立ち上げにつながり、地域町内会を中心とした避難所運営ができた。もちろん、地域と校長が阿吽の関係になっていたからであるが。

現職の校長先生方には、これからも地域の中の長(おさ)として御活躍願います。

多くの人に支えられて

千葉 尚 (前 東仙台小学校)

長い教員生活の中で、仕事を辞めようと悩んだことが3度あった。

1度目は教師1年目。校内研究の全校授業が散々な結果。仕事が向いていないのではとかなり悩んだ。その気持ちを前向きにさせてくれたのが、先生方の励ましだった。温かいだけでなく厳しい言葉の中に優しさを実感したものだ。2度目は教頭1年目。管理職として適切な指導ができるのだろうか、自問自答の日が続いた。救いは夕方の職員室だった。教頭という立場を忘れ先生方と話し込んだ。そして3度目は校長1年目。責任の重さに押し潰されそうになる毎日。「早期退職」の言葉が何度も頭をよぎった。力になったのは同僚の支えだった。

同僚性とは、「同僚が互いに支え合い、成長し、高め合っていく関係」と解釈されている。

一般には、この同僚性が職場の中で次第に希薄になってきたと言われている。確かにその傾向はあるのだろうが、少なくとも私が働いてきた職場の中では、同僚性がしっかりとあった。東日本大震災の危機を乗り越えられたのも、同僚性に支えられた全職員のチームワークがあったからだと思う。

私が教育の現場で仕事を続けることができたのは、信念とか情熱というものではなく、子どもたちの笑顔、保護者の応援、そして何よりも同僚として一緒に働き苦楽を共にした教職員の方々(もちろん校長会の先生方)の支えがあったからだと思改めて感じている。

焦らず……そして慌てず

高橋 稔 (前 松陵小学校)

退職の想いに浸る間もなく、4月1日から新しい職場での生活が始まりましたが、ある種の緊張感は3か月経った今も持続しています。ただ、現職でないことをはっきり意識させられるのは、子どもたちの姿を見ながら一緒に登下校(私は出退勤)する時です。これまでの、子どもたちを校門で「迎える・見送る」生活ができなくなったことで退職した自分を実感することはできますが、それでも4月当初は、様々な動きを見せて登下校する子どもたちに、車の窓を開けて一声掛けたい衝動に駆られたことが何度かありました。(打ち合わせの話題【変質者?】)



になりかねませんね)

振り返ってみると、現職の間は、課題解決のために学校がどんなに努力を重ねても、年度が新しくなる度に、それを上回る勢いで予想外の新たな課題が次々に積み重なっていくという印象を持ち続けていたように思います。この傾向はどの学校にも共通しており、非常識の生命力が強い時代ゆえに、校長が担う学校経営の運転の難しさは今後も続くことになると思います。その中で、小学校長会の皆様が、公私の時間を問わず、「責任」という決して下ろすことを許されない大きな荷物を背負いながら、日々ハンドルを握って奮闘されていることに改めて敬意を表します。とはいえ、到着を急ぐあまりアクセルを強く踏み続けると思わぬ事故に遭います。ブレーキを上手に活用し、一呼吸入れながら、学校経営の安全運転をしてほしいと心から願っています。

「校長先生、笑って！」

高谷 公美子 (前 南小泉小学校)

この春、適応指導教室「杜のひろば」で働くこととなり、「教育とは希望を語ること、学ぶとは生きる力を養うこと」の言葉の意味を、これまで以上に噛みしめている。

ここでは、実にゆるやかに時間が流れ、受容的アプローチを大切に子どもたちに接する。そして、その子に適した働きかけを通して「生きる力」の「その根源ともなる力」が育つのを待つ。学校教育では実践しにくい別な側面からの教育だ。

在職中、さまざまな事が重なり忙殺されそうなきほど、支えとなった思い出が私にはある。それは、1年生のある児童から、突然「校長先生。笑って！」と言われたことだ。笑顔を見せると、その子はとてもうれしそうな顔で、「さようなら」と言って、帰って行った。そのとき、「希望を語る教師として失格だ。」と気付かせられた。だから、今でも笑顔をお忘れないようにしている。

復興教育の中でこそ希望は語られなければならないし、生きる力を学ぶ内容が不可欠だ。学校教育に求められる多くの厳しい現実の中で、全ての児童に「希望となり生きる力が身に付くような実践」を自校化するのには並大抵の事ではない。立場上そうそう笑顔でいられないこともある。しかし、だからこそ、「校長が見せる安心できる笑顔」の果たす役割は誰に対しても大きいと、私は思っている。

あの日を忘れずに

片桐 正志 (前 東六郷小学校)

3月31日定年退職し、意識を変える余裕もなく、4月1日から、毎日、慌ただしい日々を送っています。勤務先の児童館の子どもたちと接していて、教諭として、教頭として、校長としてどうだったのかと現職時代の自分を考える日々です。先輩の先生方や同僚の先生方、仙台市小学校長会の皆さんに支えられて何とか重い職責を終えることができました。東日本大震災後の市教委や校長会の先生方の御支援に感謝いたします。しかしながら、被災地はまだまだ復興への道が遠いと感じています。被災地以外の地域は、東日本大震災が起こったことやその後の避難所生活などの記憶や意識が時とともに少しずつ薄らいでいくような気がします。3.11の大津波の爪痕のない地域で仕事をしていると、あの日が夢だったのではないかというように全く無縁になってきます。

そこで、私はあの日を忘れないように、できるだけ浜街道を通るようにしています。先日、教育センターのフレッシュ先生研修の講師をしましたが、拙い私の話をしっかりと聞いていた新任の先生方の真剣な眼差しや真摯な受け止め方をみて安堵しました。仙台市小学校長会のますますの御発展と皆様の御活躍を心から祈念しております。

感 謝

安部 照俊 (前 古城小学校)

これまで多くの御指導をいただきました仙台市小学校長会の先生方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

退職したらどのように過ごすか…。心のなすままに晴耕雨読とか、自分を高めるために趣味に打ち込むとか、漠然と考えたことはあったのですが、現実はそのように進まないようです。

勤務をしていた頃の多忙感はありませんが、日常の雑事に時間が過ぎ去り、自分一人だけで日々の生活を律していくことの難しさを感じています。

まずは、時間をかけて自分なりの新しい生き方を探していこうと考えております。その手始めに話題になった「断捨離」(なにかに依存することなく自分の道を自分で切り拓くための整理法)等を見直して、長い間に溜め込んできたモノの整理に取り掛か

ろうと思ひ、少しずつ着手しています。

過日発刊された小学校長会の東日本大震災の記録集「絆そして未来へ」を改めて読んでみますと、それぞれの教育現場で児童の安全確保や被災者支援活動等を行った教職員のひたむきな姿勢、思いが強く感じられます。

これからも、校長先生方のリーダーシップの下、学校の力を一つに結集することで、復興に向けての取組や新しい学校課題への対策等が着実に進むであろうことを信じております。

子どもたちのための学校づくりに向けて、校長先生方のますますのご活躍を心からお祈りいたします。

縁は異なるもの 味なもの

佐々木 浩二(前 蒲町小学校)

教職に就いて数年後に宮城沖地震を体験し、最後の勤務校で東日本大震災に遭遇した。大震災直後、教職員や地域有志と共に避難者や避難所運営の対応に追われ、4月からは、中学校校舎を借りての学校生活が始まった。その7か月間、教職員も子どもたちも、非日常的な環境の中でよく踏ん張ってくれたと感謝している。

子どもたちや教職員、地域のために、何を真っ先に進めるべきかという決断を迫られたり、制限の多い環境下で教育効果や結果をどう向上させるか思案したりの3年間であったが、学んだことも多い。

地域住民や教職員が学校を支える基盤であること、困難な状況下でも学ぶことの喜びを表す子どもたちの健気な姿が周囲に与えるエネルギー。そして、寄せられた数々の支援の根底にあるヒューマニティ等々、挙げれば切りがない。共に過ごした教職員も子どもたちも、発災から学校再建という過程を通して大切なことを学んだ。震災体験が今後の人生の糧となると言っても過言ではないだろう。

思えば、30代半ばで蒲町小学校に勤務し、校長職で再度蒲町小にお世話になったことも何かの縁、退職後に10数年ぶりに再び秋保の地に勤めるようになったのも何かの巡り合わせと感じている。

38年間の教職人生を全うできたのは、これまで勤めた学校等で切磋琢磨した仲間や同僚、教を請うた先輩諸氏のお陰である。皆様に感謝しつつ、その恩返しのため新たな縁を求め邁進したい。

課題をバネに

千葉 龍正(前 東宮城野小学校)

第二の職場にお世話になって早2か月、退職がなんだか、ずうっと前のようです。振り返ると、そうできたのもこれまでのすばらしい先輩・同僚先生方のお陰だと思っています。加えて、私は「出戻り」で、仙台市の校長先生方、校長会には大変お世話になりっぱなしでタイムアップとなりました。

最後の学校となった東宮城野小学校では、よし次の年とは2年目を展望していた矢先、あの東日本大震災です。御承知のように荒浜小学校と一つ屋根の下で教育活動を進めることになりました。東宮城野小学校は児童数200数名でしたので、新しい友達が増えるんだからパワーアップになるし、お互い切磋琢磨、よきライバルになろうという姿勢で迎えることを、職員はもとより子どもたちに話しました。荒浜小学校のいわゆる「間借り」状況にある新聞社が「寄留」と表現しその呼び慣れない「寄留」が、荒浜小の川村校長先生と確かめ合った、互いに高め合いながら一緒に歩みましようとする立場や意志を表現しているように私には思われました。「やるしかない」という出発から3年目。どこの学校においても新たな局面を迎えているのだと思います。

大きな比重を占める震災復興課題に加え、いつも多様な教育課題を抱える学校です。そんなときこそ仙台市小学校長会のモットーとなる団結とこれまで蓄えた叡智、行動力を発揮していただきたいと思えます。これまでの御指導に感謝しつつ校長会のますますの御発展を祈っております。

希望に満ちた復興教育を願って

関東 正春(前 南材木町小学校)

東日本大震災から2年5か月余り、いまだに不自由な生活を送っている方々や精神的苦痛を抱えた方々が多数いらっしゃいます。年月が経つにつれて、震災の影響が計り知れないほど大きいことを実感するとともに、震災の風化が懸念されるところで

私の第二の職場である児童館では、震災時に地域と連携して何ができるのかを、地域自主防災組織の一員として模索しています。また、自分の住む町内会でも、今年度の最重点課題として地域防災計画の策定を取り上げています。仙台市(宮城県、日本と

言っていいかも)は、町内の津々浦々まで自助・互助・共助の取組が浸透していて、すばらしいものだとつくづく思います。それらの取組の中心的な役割を担っているのが学校です。校長先生方におかれましては、時代を担う子どもたちのために思う存分手腕を発揮していただきたいと思います。私も、退職間近ではありましたが、震災の風化を防ぐべく自校に「防災学習室」を作って、子どもたちや地域の方々が震災を後世に伝えられるようにしました。

さて、退職してからの私の生活はと言いますと、ストレス皆無、食欲もりもり、ぐっすり眠ってさわやかに朝を迎え、趣味のガーデニングにも時間を注ぎ、毎日、新鮮な生活を送っています。現役の頃は、常に緊張状態にあり力が入っていたのだと悟りました。今後は、力が抜けすぎて腑抜けにならないように適度なストレスも課しながら、今後の人生を再建しようと思っています。

備えあれば

細倉 公一 (前 西中田小学校)

退職目前の時期に開かれた地域の会合に出席した折、役員の方々から「震災の時の校長先生なので、忘れられない先生です。」とのお話をいただいた。た

いへん御苦労なされた他地域の校長先生方を知っているだけに、やや気恥ずかしさを感じた。

3.11の東日本大震災では、普段の訓練が生かされ、児童の安全を確保するための避難行動には、ある程度の冷静さを保ちつつ対処できたように思う。予想外だったのは、体育館に集まってきた地域の方々である。避難所開設・運営については未経験であり不安を残しての開設ではあった。ただ、中田西部地区(柳生中学区)は、学校と地域の方々による防災対策会議が何度か開催されており、指定避難所開設についての基本的な話し合いがなされていた。大地震発生後の夜には、避難所運営委員長(町内会長)から、「土・日の2日間だけ、学校主体で運営してほしい。後は、町内会主体でやるから。」との連絡を受け、見通しを持って運営することができた。

振り返ってみると、事前に開いた数回に及ぶ防災対策会議が、校長として判断、決断を迫られたとき、そのよりどころになった。ベストな判断はできなくても、ベターな判断なら可能である。有事を想定しての事前の「備え」があればこそである。

反対に「備え」がなくて、ピンチに立たされたのが、放射線量への対応である。紙面の都合で詳細は書けないが、教育委員会との連携・協力により、乗り切ることができた。

編集後記

全国各地で猛暑日が続く今年の夏ですが、仙台は梅雨明けが例年より遅く、涼しい夏休みを迎えました。

さて、仙台の夏を彩る最大のイベントと言え、8月初旬の仙台の街は錦の衣をまとった竹飾りに包まれます。その中心とも言える一番町アーケードには、今年も、児童生徒による故郷復興プロジェクト「あしたにかがやく星に願いを〜つなごう!復興への思い〜」と銘打ち、市立小中学校、特別支援学校、中等教育学校の児童生徒の手による折鶴が飾られます。このプロジェクトは、東日本大震災以降3度目となりますが、今や、教育における復興を目指す仙台市の教育の象徴的存在となりつつあります。

本号では、「復興に向けた取組を通し、たくましく生きる子どもを育てる学校経営」をテーマに、仙台市教育振興基本計画に基づき、復興を目指し、これからの時代をたくましく生きるために必要な力の育成に具体的に取り組み始めている学校の実践例を特集として紹介しました。

11月には、第67回指定都市小学校長会研究協議会仙台大会が開催されます。29名の先輩校長先生方から贈られた心強く温かい励ましを受け、会員一同、「心をひとつに」「オール仙台で」を合言葉に、大会に向けて力強く歩を進めてまいりましょう。

震災後3年目を迎えても、熱いお励ましと御支援をお寄せくださる全国の校長先生方に、改めて感謝申し上げます。今年度も、仙台市小学校長会は、夢と希望をもち、たくましく生きる子どもをはくぐむ学校経営に邁進してまいります。

最後になりますが、御多用の中、玉稿を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

(H25.8.1 83号担当チーフ 丹治 記)

編集担当者：丹治 重廣(将監小) 三嶋 廣志(宮城野小) 渡部 定男(古城小)
葛西 雄二(川平小) 石野 勝美(長町小)